



# 新潟県立がんセンター新潟病院での 二十八年間を振り返って、 そしてこれから

南部郷総合病院 院長  
元 県立がんセンター  
新潟病院 副院長  
**梨本 篤**



新潟県立「胃・友の会」を設立しました。がんセンター 最初は一〇〇名余りの方々に新潟病院(新 会員として登録していただき、第一 潟がんセンタ 一回総会は約六〇〇名の参加を得 ー)で二十八 て盛大に行われました。妹夫婦も 年間外科医と 東京から駆けつけ参加しました。 して仕事をさ 四五〇名収容できる会場が満席と なり、立ち見の方々が多く見受け られました。第十回総会には新井満 さんに特別記念講演をお願いし、 「千の風になって」をテーマに歌、 朗読、トークと至福の一時間を 過ごすごうことができました。「私 の お墓の前で泣かないで下さい。そ こに私は居ません。千の風になっ だきました。末の妹が腹痛を訴え 電話をしてきた時、東京から呼び 寄せ小越先生に内視鏡をしていた だきました。すぐに診断がつき、 最小限の検査を追加した後、直ち に手術をさせていただきました。 術後経過を見ていくうちに手術を うけた患者さんたちが集まって相 談したり、親睦を深めたりする会 談の必要性を痛感し、一九九六年に た第七十六回日本胃癌学会総会で 「Yes, we can!」に通ずるところ

# 大学勤務を振り返って、 そして、これから

新潟 大学 医 歯 学 総合  
病 院 消化器内科学  
(元 新潟大学大学院医歯学総合研 究科 消化器内科学分野野准教授)  
**野本 実**



勤務医ニユ ー スに何か書 くようにいわ れて、いつも の癖で安請け 合いましたもの、いざ書く 段になるとはたと困ってしまいま した。私には何も誇れるものもな かりません。この文章は皆さん にとってさぞ無駄な時間を提供す るであろう事をまず謝らなければ なりません。

私は消化器内科(旧第三内科) の准教授の職を定年まで勤めて、 今年の三月三十一日に新潟大学を 退職致しました。稀有な症例で、 こんな医者もいたのかと思っ て頂 ければと思います。お世話にな った多くの皆様方には紙面を借り

理事に立候補し、最下位ではあり ましたが何とか当選することがで きました。当時のことは懐かしく 鮮明に思い出します。無謀とも思 われた地方がんセンターからの立 候補でしたが、多くの先生方から 応援していただきました。諸先輩 が培われてきた新潟県における胃 腸医療の質の高さが評価された結 果であったと感謝しております。 二〇一〇年三月、「温故知新」を テーマに第八十二回日本胃癌学会 総会を新潟市で主催させていただきました。二年間準備に追われま したが、本会の三日間はあつとい う間に過ぎました。新潟県の胃癌 医療レベルの高さを再確認できた 絶好の機会でもありました。新潟 がんセンターの臨床成績が良好で あることは全国的にも広まり、マ スコミも繰り返し取り上げてくれ ました。二〇一三年十一月には「率 先垂範」をテーマに第四十三回胃 外科・術後障害研究会の当番世話 人も務めさせていただきました。

医師は半分ボランティアの職業 です。多くの医師が医療に対する 責任感にあふれ、医療を少しでも 良くしようという努力をしています。 上杉鷹山の「成せばなる」は好き な言葉の一つで、オバマ大統領の 「Yes, we can!」に通ずるところ

捨てきれず努力しました。紆余曲 折を経て市田文弘教授の「いざれ 埼玉に帰してやる」というお言葉 に誘われて、第三内科に入局する 事となりました。もともと「良い 臨床医」になるために病理で勉強 したので、第三内科で顕微 鏡を観る仕事は本意ではなかった のですが、流れの中で、肝臓の 形態診断に深く関わるようになって しまいました。「いざ鎌倉」の 考えのもと、診療手技の習得に力 を入れてきたつもりでしたが、研 究・教育・事務仕事などをやって いる間に、目を見張る消化器医療 技術の著しい進歩の中で、あつと いう間に置いていかれてしまいま した。もともと早くに転身を図りポ ジションの後輩に譲れば良かった のかも知れませんが、あるいはそ ういう批判があるかと思いつく が、肝疾患の組織診断を通して病 気の本質や成り立ちを理解しよう と考え、また、当然ですが正確な 病理診断を目指しているうちに、 するという結果となってしまいま した。

医師の定年後の進路は、「老健 や特養施設などで働く」、「仕事自 体を止める」、「他の病院の勤務医 になる」がトップ三でほぼ同率で す。「開業する」はわずか七・〇 %であり、定年まで勤務した後 に関業するのは難しいということ がわかります。新潟がんセンター を三月末で定年退職しましたが、 現役生活をもう少し続けたいと思 い、四月から五泉市にある南部郷 総合病院で外科医兼院長として活 動を開始しました。ここは新潟医 療圏に組み込まれていますが、東 部は山間地が広がり冬は積雪も多 く、全く別の医療圏だと思われま す。人口減少、超高齢化が進んで おり、五泉市東蒲原郡医師会と密 に連携しながら、安心して医療が 受けられる地域医療圏の構築を目 指していきたいと思っています。 まだまだ慣れないことも多く手探 りの状態ですが、これからも先生 方のご支援を何卒宜しくお願いい たします。

医師という立場を通して常に 社会貢献という事は考えていまし た。日常診療も立派な社会貢献と 思っています。本来、考えていた 社会貢献ができた自信はないので すが、平成十六年の三条の七・十三 水害の時には下条文武病院長の ご許可を頂き、ボランティアを 条件に教室の先生と現地に赴き、 医療活動を行いました。同年十月 二十三日の中越地震の際も十日町 病院に伺い、心肺停止で来られた 方をお看取り致しました。ご家族 のお話などからエコーミックス 症候群と考えました。サッカーの 高原選手がエコーミックス症候 群に罹った事が話題になった後で あり、直感的に思い浮かびました。 自家用車に寝泊まりしての避難生 活との事で、その危険性を新潟大 学として発信してほしいと下条病 院長にお願いして、ZETのニュー スで取り上げてもらいました。そ の後の災害時避難生活対策の上で お役に立つきっかけになったと考 えています。

# 医師不足はどうなるのか

元 県立六日町病院 院長 **吉田 和 清**



医学部に入 学して退職 を迎えるまで 半世紀近くの 年月が過ぎ去 りました。こ の間、医師の 需給状況をどのように意識してい たのかを振り返ってみました。

学生の頃は、田中角栄内閣の一 県一医大政策により医科大学や医 学部が全国に新設された時代 でした。その頃から、将来は医師 過剰になると言われ、報道もされ ています。真偽を確かめたこと はありませんが、イタリアでは医 師が過剰となつてタクシー運転手 までしているというようなことも 流布されていました。また、新潟 市内では一六号線の小針周辺で は開業しても銀行が融資しない そうだとの噂話もありました。

卒業後は内科を選択して、一年 目は大学病院で、二年目は秋田組 合病院で研修医として勤務医生活 を開始しました。前期研修終了後、 内科の中の進路もいろいろ考え

ました。医師過剰になることなど は意識せず、先輩や教授の人柄に ひかれて第二内科に入局し腎班に 入りました。

当時の医局にはいろいろな病院 の院長が医師確保のために来られ ています。その頃の県立中央病 院の院長先生も医局の大先輩でし た。エレベーターの前で交わした言 葉は今でも忘れられません。「先 生、今日はどうされました」「医 生をもらいに来た。今は誰でもい いから頼みに来たのだが、君が 医局から出るころは医師過剰にな っているだろう。その時は俺が試 験をしてやるからな。今から覚悟 をしておいた方がいいぞ。あはは は……」というような状況でした。

大学に在籍した間、現在の県立 六日町病院へ人工透析の開設のた めに半年、その後腎研施設に二 年間出向しました。そして入局約 十年後の平成元年に新潟市市民病 院へ赴任しました。このころも医師 の過剰は意識になつたと思いま す。

市民病院在職中に県医師会の勤 務医ニュースの編集にも携わりま した。勤務医に関する意識調査 報告が五年毎に行われていま す。平成二年三月の報告書では「医師 急増について、あなたはどのよう に思われますか?」「医師急増を あなたは実感されていますか?」と いうような設問があります。平成 十二年のコメントには「勤務医は 増員を希望する人が多い。全国的 には医師過剰が問題になっている にもかかわらず……」というよう な記載があります。このころになつ て医師過剰時代の到来が感じられ つつあったと思えます。

これが急転したのが平成十六年 度からの新臨床研修制度です。始 まった翌年の平成十七年春に突如 六日町病院へ院長として赴任す ることになりました。医局の送別会 で当時の院長から「市民病院では 医師不足はないが六日町では苦労 するぞ」と言われました。新臨 床研修制度の開始により、全国的 に大学医局への医師の引き上げが 報じられていました。市民病院で は多忙感がありました。市民病院で

# 編集後記

現在日本では、勤務医と開業医 の割合は六対四で勤務医の方が多 くなっています。また一方、平成 二十三年に行われた新潟県勤務医 へのアンケート調査では、将来開 業を望んでいる医師は初めて五〇 %を下回りました。多くの医師が 定年まで勤務医を続ける状況の 中、今回はこの春定年を迎えられ た先生方に寄稿いただきました。 還暦を過ぎた身には、長年、臨床 に研究に教育に携わってこられた 先生の声に傾ける点が多く、感慨 深いものを感じました。

新潟県内の勤務医が、誰一人疲 弊すること無く、生きがいを感じ ながら長く活躍し続けられるよう な医療環境が整備できるように願 っています。(富 所)

これから